

ヨハネによる福音書 5章9b~18節

今月は、前回からの続きとして、「ベトザタの池の病人」のその後から 聖書の語りかけを学ぶことにしましょう。題材自体はなんとも後味の良くない出来事ですが、しかし そんなところからもなお、私たちを導き励ますイエス・キリストの真実を知ることができたらと願います。

ちなみに、聖書の記述には 通常、どこのひと括りをとっても 中心的な言葉というのがあるものですが、今月のそれははたして どの一節でしょうか。実は、一紙幅の関係で、今月はそのうちの一つだけに焦点を当て、残る一つについては別の箇所でも改めて触れることにしますが—今回はそれがどうやら、2箇所あるようです。そうしたことにも留意しつつ、今月の学びを進めてゆけたらと思います。

同じようできて、が 全く対照的な二人の人物

- ・私たちは前回から「ベトザタの池の病人」の出来事（5：1~18）を読み継いでいますが、同じヨハネの福音書によく似た出来事がもう一つ記されているのを覚えておられるでしょうか。
- ・二人は全く同じように、思いもかけず イエスに出会い、そしてまた 全く同じように、思いもかけず イエスに癒やしてもらいます。
- ・けれども、一方は前よりさらに深い闇の中へと向かうのに対し、もう一方はそれとは対照的に、光の世界に導き入れられます。
- ・そのもう一方については 追って学ぶことにはなりますが、それにしても、なぜ そうなったのか。二人の違いはどこにあって、それは本質的に どこから来ているのか。
- そして、その違いによって、二人の人となりとその後の生き様がどう別たれてゆくのか。
- ・もう一方とは「シロアムの池の盲人」（9：1~41）ですが、この盲人の有りようを思い浮かべつつこれらについて考えてみると、大切なあれこれが見えてくるように思われます。

「その日は安息日であった」（9b）

「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」（10）

- ・今月は、前回の後を受け、「その日は安息日であった」（9b）との説明から始まっています。
- ・「安息日」（9b、10）は今回の事件の中心にある問題の一つで、聖書の語りかけを聴き取るうえでのかぎとも言えるでしょう。
- ・癒やされた男は池を後にし、エルサレムの市内に向かっていたのでしょう。そこにやってきたのがユダヤ教の指導者たちで、男に厳しく命じます。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」（10）。
- ・それは、律法にこう定められていたからでした。「もしも 安息日に 公の場所から自分の家に故

意に物を運ぶ者があるなら、その人間は罰せられて、死ぬまで石を投げつけられる」

・「安息日」(9b、10)とは、ユダヤの暦こよみの数え方で「金曜日の日没から土曜日の日没に至る一日」を指します。天地創造わざの業を終えられた神が「第七の日に・・・御自分の仕事を離れ、安息なされた」と記す、旧約聖書の「創世記」の言葉(2:1~3)に基づいています。

・この言葉に基づき、ユダヤ教の教師たちは、安息日に労働することを一切禁じました。

・実際、その規定は驚くほどのもので、まず大きく39の種類のちに分類され、その後、それぞれについてさらに細かく、何百何千という決まりに拡大されていました。

(例)「安息日には、ランプの灯りあかで読み物をしてはならない」

(問) どうしてでしょうか？

・当時の人々は、こうした律法の規定のもとで生活を営んでいました。

・その歴史的背景や社会的状況を想像しつつ考えるとき、こうした規定や規則を、皆さんはどう思いになられるでしょうか。

それらは、

①人々にとって どういうものだったか？

②指導者たちにとって どんな意味があったか？

そして、

③彼らにとって いかなる役割を果たしていたか？

ユダヤの当局者：「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」(12)

「しかし、病気をいやしていただいた人は、それがだれであるか知らなかった」(13)

・そうしたなか、ベトザタの池の男は藁わらのベッドを運んで、その一つを破ったわけです。

・そこで、ユダヤの当局者が男を詰問きつもんします。「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」(12)。

・ところが、男はこの問いに答えられません。「それがだれであるか知らなかった」(13)というのです。

・だとしたら、ここに男の人となりかいまみが垣間見られはしないでしょうか。

・どうして、それがイエスだったことを知らないのか。

①歩けることに夢中になって、名前を尋ねるのを忘れてしまった？

②そもそも、感謝の思いがそれほど強くなかった？

③そうこうしているうち、イエスがどこかに行ってしまった？

・池の男は はたして、どんな人間だったのでしょうか？ その人となりはどんなものだったのでしょうか。

— 場面① —

ユダヤの当局者：「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」(10)

池の男：「わたしをいやしてくださった方が、『^{とこ}床を担いで歩きなさい』と言われたのです」(11)

—場面②—

状況：「その後、イエスは、神殿の境内でこの人に出会って・・・」(14)

池の男：「この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた」(15)

- ・このように、池の男はイエスの名前すら聞きませんでした。
 - ・そもそも、^{あんそくび}安息日に^{とこ}床を^{かつ}担いでいたことを責められたとき、男は「わたしをいやしてくださった方が・・・言われたのです」(11)と答えています。
 - ・それはつまり、男のどんな心理が言わせたと考えられるでしょうか。
 - ・さらに、男はそれにとどまらず、神殿でイエスと再会するやすぐさまユダヤの当局に出向いて、イエスのことを「ユダヤ人たちに知らせた」(15)といます。
 - ・こうした行為を、私たちは普通、何と呼ぶでしょうか。
 - ・そしてそれを、男はいったい、何が理由で・何のためにしたのでしょうか。
 - ・こうして、池の男をめぐる一連の記述は閉じられますが、
①そこに^{にじ}しみ出ている、男の人となりは？ 人間性は？
②それらと私たちとの関係は？
③そして、そこから読み取るべき、私たちへのメッセージとは？
- はたして、いかなるものでしょうか。
- ・他方、ユダヤの指導者たちにとって、池の男はどんな存在だったのでしょうか。
 - ・すなわち、彼らにとって、病人が癒やされるということにどれだけの意味があったのか。彼らの関心事は、実のところ、どこにあったのか。
 - ・そして、いったい何が、そのような彼らにしたのか。彼らの根っこの問題ははたしてどこにあったのか、ということです。
 - ・そのうえで、ここでもまた、それらは私たちと無縁なものなのだろうか。私たちとどんなふうに関係しているのか、と考えさせられます。

「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはならない。

さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」(14)

- ・神殿で再会した男に、イエスが言われた言葉です。
- ・男はイエスにこう言っていただいたのに、そのイエスをユダヤの当局に引き渡してしまいます。
- ・男は依然として、病を病んでいたのでしょうか。それはいったい、どんな病だったのか。ベテスダの池の病人の本当の病とは何だったのでしょうか？
- ・イエスがここで「罪」と言われていることと、それはどんな関係にあるのか。ここでの「罪」とは具体的にどんなことなのでしょう？
- ・そして、「もっと悪いこと」とは？
- ・さらには、池の男のそれらを超えて、イエスがここで 私たちに語りかけてくださっていることと

は何なのか。いま一度、そこまで聴き取っていただきたいと思います。

「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(17)

「イエスが、安息日あんそくびにこのようなことをしておられたからである」(16)

・そんななか、イエスははっきりと言い切られます。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(17)。

・そもそも、安息日あんそくびとは禁止の日ではなく、天地創造わごの業の完成を喜ぶ「喜びの日」であり、「祝福の日」でした。また、神が創造の業を終えて休まれた「休息の日」であり、「癒やしの日」でした。

＊参照：「天地万物てんちばんぶつは完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別せいべつされた」(創世記 2:1~3)。

・こうして第 7 の日が「安息の日」として定められたのですから、安息日とはむしろ、良いものや命あるものの完成を意味する業の象徴として、それらを生み出す業の象徴としてあったものでした。

・なのに、イエスの当時、ユダヤ教のそれは禁止の規定や形式ばかりのものになっていました。

・だとしたら、それはイエスの考え方とどうなのか。相いれるのか、それとも相いれないのか。17 節はまさに、そうした中から発せられたイエスの言葉でした。

・「働いておられる」「働く」(17) とは、言うもでもなく、「良きことを行なう」「いのちあるものを生み出す」ということです。

・であれば、安息日にそうすることが、そのそもそもの精神から見て、不適切なことかどうか。どう思われるでしょうか。

・ちなみに、16 節を見ると、「イエスが、安息日あんそくびにこのようなことをしておられたからである」とあります。

・ということは、つまり、イエスが安息日の決まりを破られたのはこれが初めてでなく、繰り返し、何度も破っておられた、ということではないでしょうか。

・それにしても、自ら進んでリスクを負うような そうしたことを、イエスは何のために、また誰のためにされたのでしょうか。

・そこに見て取れるイエスの思いとは？

・要するに、イエスが異を唱えられたのは いったい、何に対してだったのでしょうか？

ユダヤ教の指導者たちに対するイエスの批判の中心はどこにあったのでしょうか。

・そして、今日こんにち・この時、私たちが心して 気をつけねばならないこととは？

.....

— 追 記 —

・今月の段落における中心的なくだりの 2 つ目とは、「イエスが・・・御自身を神と等しい者とされ

た」という、18 節に記されている最後の一節です。

- ・「安息日^{あんそくび}を破るだけでなく・・・」(18) と 追加の説明が直前に付されていますが、これがため、「ユダヤ人たちは、ますます イエスを殺そうとねらうようになった」(同) といえます。
- ・この一節には 実は、これまで述べてきた以上の問題とより決定的な意味合いが含まれてもいるのですが、それについてはまた、別の箇所でも改めて触れることにしたいと思います。

[参 考]

- ・キリストの教会は、良いものや命あるものの源は復活のイエスにこそあると信じ、安息日^{あんそくび}をユダヤ教の土曜日から 甦^{よみがえ}りの日曜日に移して これを「主の日」とし、日曜に礼拝をまもるようになりました。
- ・であれば、その意味合いも自^{おの}ずから知られるのではないのでしょうか。